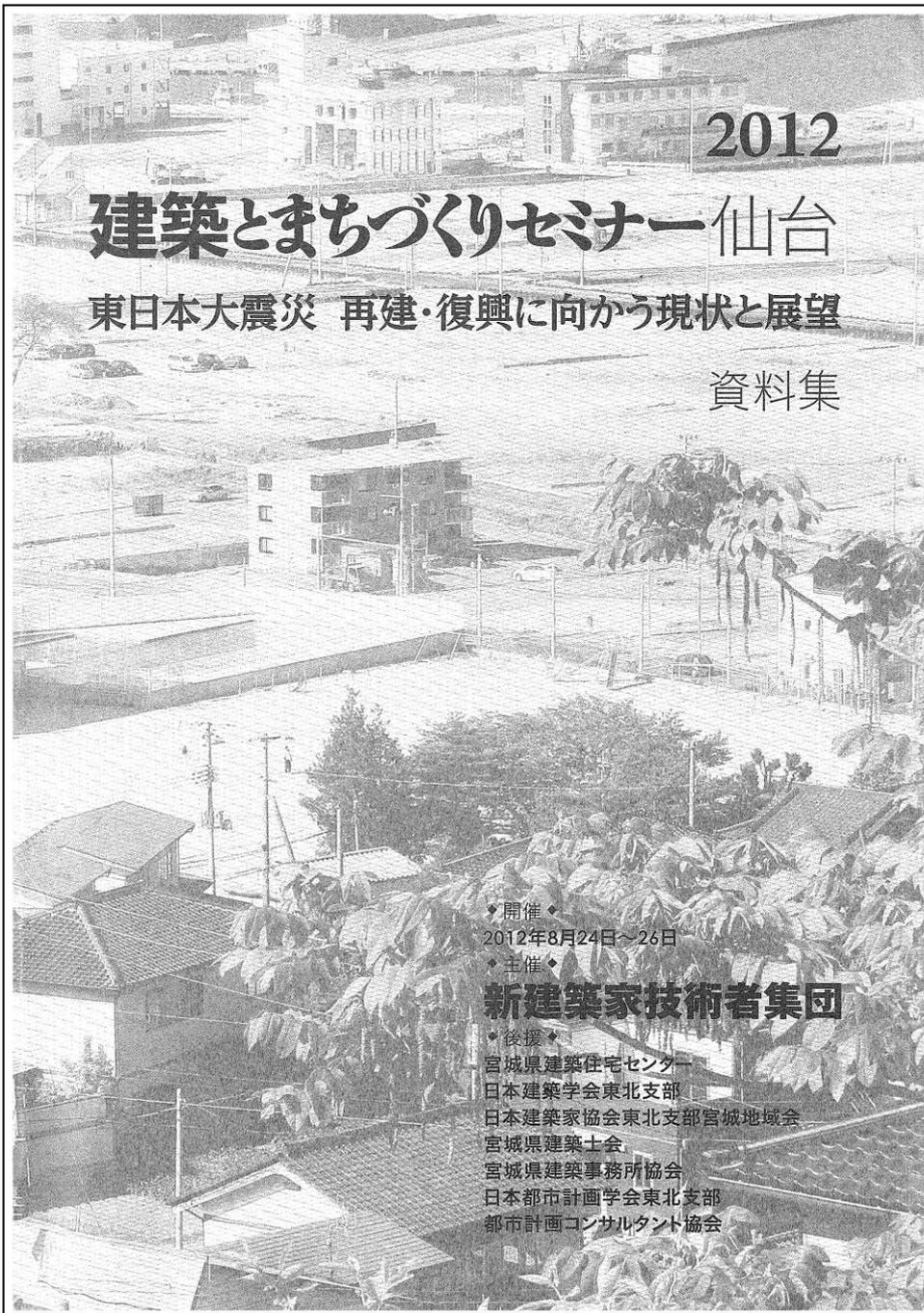


新建福岡・NOW

第5号 2012.09

発行元
新建築家技術者集団
福岡支部事務局
〒815-0041
福岡市南区野間 3-9-20-4F
[ケイ・プラッツ内]
Tel/Fax 092-541-8128
HP : shinken-fukuoka.net

建築とまちづくりセミナー仙台の参加報告



1日目(8月24日)

第1講座

大都市仙台の被災と今後の課題

仙台市復興事業局長

山田 文雄 氏

第2講座

岩手三陸沿岸都市の復興状況と課題

震災津波救援・復興岩手県民会議

岩手県会議員

斉藤 信 氏

第3講座

被災者・建築家として

～地域・住宅復興の取組

建築家・新建宮城支部会員

佐々木文彦 氏

意見交換会

講師の方や後援団体の皆さんとの意見交換会

2日目(8月25日)

パネルディスカッション

『原発事故でまちと暮らしに

何が起きているのか』

基調報告 鈴木 浩 氏

(福島大学名誉教授)

パネリスト 丹波 史紀 氏

(福島大学准教授)

玉川 啓 氏

(浪江町復興推進課)

和田 正光 氏

(エコビレッジ代表)

コーディネーター 遠州 尋美 氏

(大阪経済大学教授)

被災地視察(午後)

仙台市あすと長町仮設住宅、仙台市荒浜など

3日目(8月26日)

被災地視察

1. 岩手コース——気仙沼、陸前高田、大船渡を回り、住田町仮設住宅を訪れて水沢江刺駅で解散
2. 宮城コース——南三陸、石巻十三浜、石巻市内を回って仙台駅で解散



2011年3月11日から約1年半後である今年8月24日～26日に仙台で行われました「建築とまちづくりセミナー仙台」に参加してきました。参加者は、福岡支部から片井、鹿瀬島、井上、中島、田中、熊本支部から入口さんの総勢6名でした。個人的には、仙台を訪れるのは、2000年に行われた新建第22回全国大会以来でしたので、その時を思い出しながらの参加でした。

なお、今回報告させていただくものは紙面の都合上、ほんの一部でしかありませんため、内容が断片的であることをご容赦ください。（言葉足らずで誤解を招いた場合は、すみません。）

● 仙台空港近くの海岸

まず、最初に違いを感じたのは、着陸直前に見える海岸の光景でした。緑いっぱいのグリーンベルトと海の青さのコントラストが見渡す限り続く印象的な海岸線でしたが、現在は全く面影がありませんでした。

この海岸線が、以前の緑豊かな海岸線に戻るにはどれくらいの時間がかかるのでしょうか。



仙台空港近くの海岸

● 仙台空港

3.11の際、テレビ中継で津波が押し寄せ、飛行機等押し流し、ターミナルが孤立する様子が放映されていましたが、現在はその時を思い起こさせるものは空港及び関連施設には有りませんでした。

ただ、空港周辺には災害の爪あとが残っているのも見受けられました。



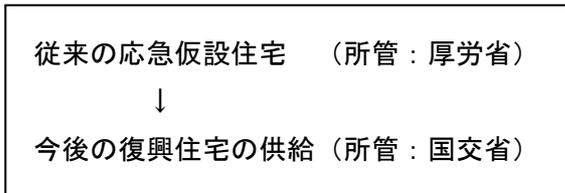
仙台空港の様子

● 講座/見学会でのトピック（それぞれ1つずつ）

① 避難者の居住問題について（講座にて）

各講座とも、マスコミ報道等では伝わってこない危機感のある問題提起が多くありました。

その中で感じたのは、誤解を恐れずに言えば、復興は思ったよりも質的に進んでいたこと——言い換えれば、取り組むべき課題が短期的視点から長期的視点にシフトし、その内容は複雑で、また目に見えないものが増えている状況でした。（不勉強だったのかもしれませんが）具体的には、

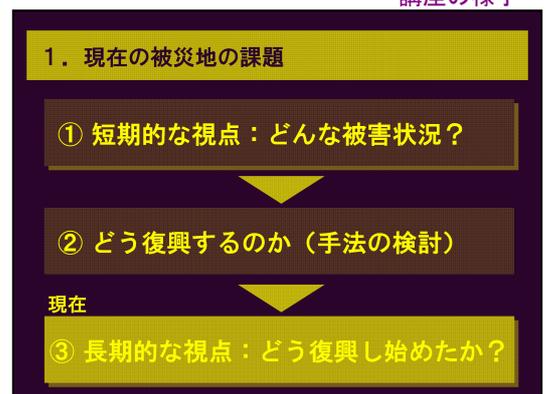


へシフトしつつあることを感じました。

応急仮設住宅の供給方法や居住環境、自治運営などの実情や問題点を検証・レビューすることも重要なことは疑い



講座の様子



の余地はありません。

ただ、恒久的な住処となる復興住宅をどうつakって（供給して）いくのかという取り組みは、応急仮設住宅とは全く異なる課題を有するものであり、地域福祉・医療や産業再生、地域防災、コミュニティづくりなどの長期的視点に立たなければならない非常に難しい取り組みであると言えます。

また、応急仮設住宅でやっと形成されたコミュニティが、高台移転等で全く違う地域につくられた復興住宅において、

- ・そのまま住民のメンバーも含めて維持されるのか？
- ・応急仮設住宅の住民がそれぞれ違う地域に入居となり再度つくり直しなのか？
- ・さらには、「災害救助法」に定められた応急仮設住宅への居住期間（原則2年間、ただし1年間の延長有）に対して上記の取り組みが間に合うのか？
- ・5年間帰宅不可とされた地域の住民は応急仮設住宅の入居期間終了後の2年間はどうするのか？

などソフト面も含めて、二次的・複合的な課題が山積している状況が伺えました。



現在の津谷川付近の様子

②「何を守るのか」（見学会にて）

3日目の被災地視察（岩手コース）に参加しました。その中で、気仙沼の小泉小学校で津谷川付近での津波被害の状況を知り、考えさせられることがありました。

この地域は、海岸からだけでなく河口域から遡上した津波により河川周辺部が多大な被害を受けており、それに対して、今後高台への集団移転に加えて、海岸沿いの防潮堤や河川の両岸にも防潮堤を構築する案を計画中であるというお話でした。

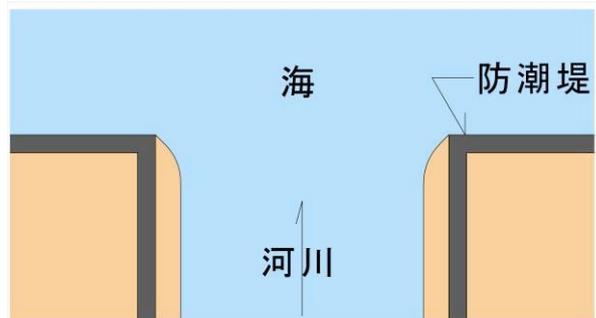
とりわけ防潮堤の高さは、今回の津波の高さを勘案して15mを想定しているとのことでしたが、これを建設した後、塀で囲まれ、海や川なども見えなくなり、まちの風景はどうなるのか？

また、この防波堤を建設するのに膨大な工事費用が必要なのではないのか？

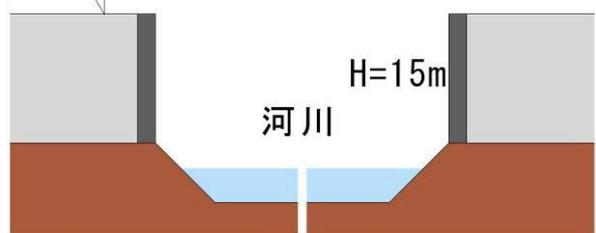
多くの尊い人命が失われたことから学んだ教訓を踏まえながら、「何を守るべきか？」の視点に立脚し、どこに重点を置いて防災・減災を進めていくかで、まちづくりの方向性が大きく違ってくるはずです。

このことについて、視察参加者の多くが現場で意見を交換していました

多くの課題に対して、どう折り合いをつけ、どう着地するのか、大変難しいまちづくりになると感じました。

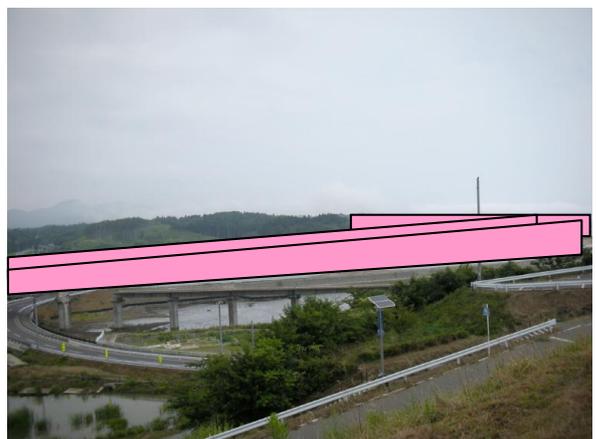


(平面)



防潮堤はこんな感じ？

(断面)



防潮堤はこんな感じ？（識別のため着色）